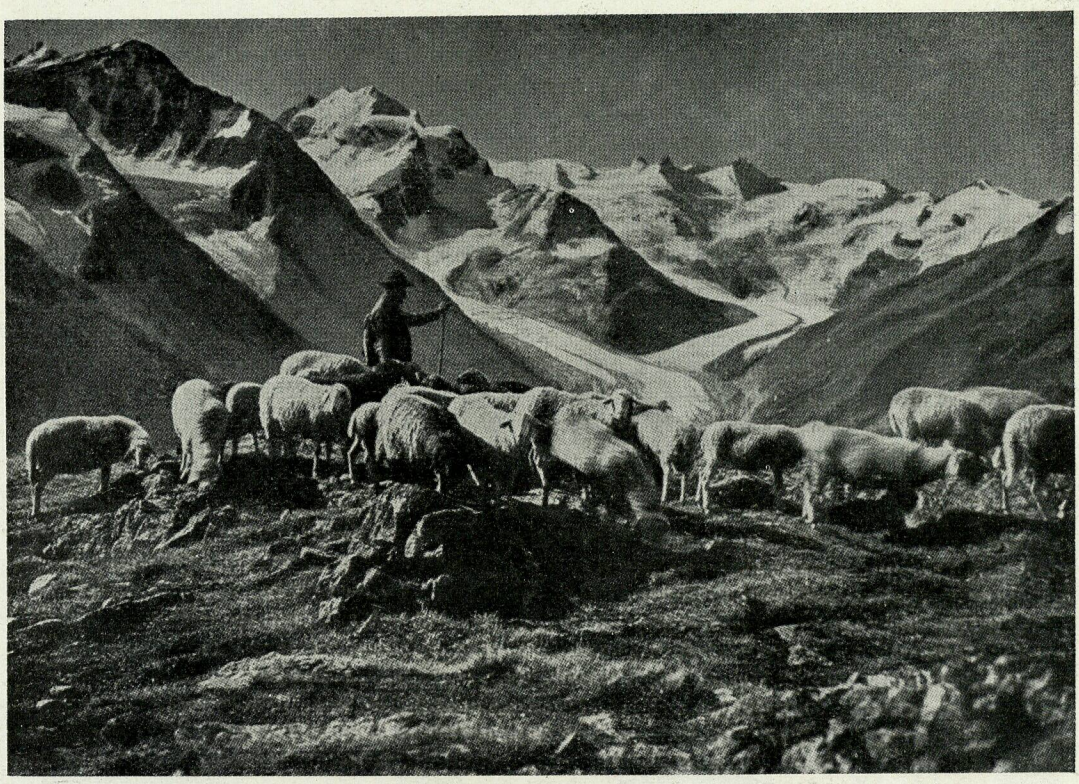
彌生祭りの子供　アルプスの雪が溶けて萠えたる若草めざめて家畜が先頭の音に勇んで登る頃山村では子供等とともに樂しみこの上もない彌生祭が行はれる。そしてその日は子供と名の附くものは例へば生れたての赤ん坊まで一緒に祭つなに參加するのである。



羊鳴くアルプ　春まだきアルプで長さ數十間に亘る數百頭の羊を御して行く子供を連れた夫婦連れの牧者に逢つたときとほぼ同じ和やかな氣分と親しみとをもつものがあるまい。無心に草を食む羊とそれに見入つて身動もせぬ牧者。山の靜けさが身に迫るやうだ。

きである。さうした期間は大概のホテルは門を閉してゐるから、村の素人下宿か、貸間を探して宿とせねばならぬ。

山村の生活は大概牛や羊を飼ひ、そしてバターやチーズを製造することによつて支へられてゐる。三月の初めになると、永い冬を通じて厩に閉ぢ込められてゐた家畜どもは一齊に曳き出され、そしてアルプ（牧草地）に放される。アルプは、普通谷間の森林地帶と、岩や萬年雪が露出する山稜との中間に位置する高原性の綠草地を呼び馴らしてゐる。このアルプは、また多くの場合、オーベル、ミッテル、ウンテルの三段に分たれ、家畜の飼養場としてスウィスの國富に重大な關係をもつてゐる。春の初めに、山麓の最も下部のアルプの雪が解け去るのを待つて、家畜どもは先づそこに放され、香味と滋養に富んだ飼草に飽くなき食慾を充たす。そして低地のアルプの草が乏しくなり、同時に中段の綠草地の雪が消えて若萠えが吹き初めると、高きを逐うて群をなして上る。かくて六月の末にもなると一番高いアルプに出かけて、秋が訪れるまでそこに滯留する。そしてそろそろ涼風が渡り、木の葉が黃色くなる頃には、今度は山陵を下り、途中で更に一月あまり道草をくつて、十月の末までには冬籠りの準備をして待つて谷の村落に歸つて行く。

これらの牧牛の群はおほくの場合、一村または一部落の所有者が共同で、牛飼を雇つてアルプに放牧する習慣になつてゐる。そしていよいよ谷を出發する日には、五十頭、六十頭、ときにはそれ以上の牛の群が村の廣場に勢揃ひし、集つた牛の中で最も逞しい、立派な牝牛が先頭になつて山入りする。この選ばれた牝牛は、特に大きなよい音のする頸鈴で裝飾され、何時でも仲間の先頭に立つて意氣揚々として進んでゆく。そして決して自分で位置を間違へたり、他の牛と交替するやうなことはしないといはれる。尤も、年を取り過ぎたり、病氣に罹つたりして優越性を失つたやうな場合は、彼の女

の頸鈴は外されて他の仲間の首に結び替へられる。つまりこの頸鈴の受授によつて、かれ等の仲間の王位――支配權――が讓渡されるので、その慣習は畜類の仲間において、意外とされるほど嚴として遵守されるといふことである。

山村の『彌生祭り』

この家畜の群がアルプに向つて「山入り」をする日には古くからスウィスの山村では、首途を祝ふ祭禮が行はれる。それは家畜どもの山にある日の健康と無事を祝福するもので、期日はその年のアルプの雪が消え、草が芽を吹くシーズンの遲速に拘らず、三月一日と極つてゐる。そしてこの祭禮を、『彌生祭り』――シャランダ・マルス――と呼んで、どこの村でも盛大に行はれる。

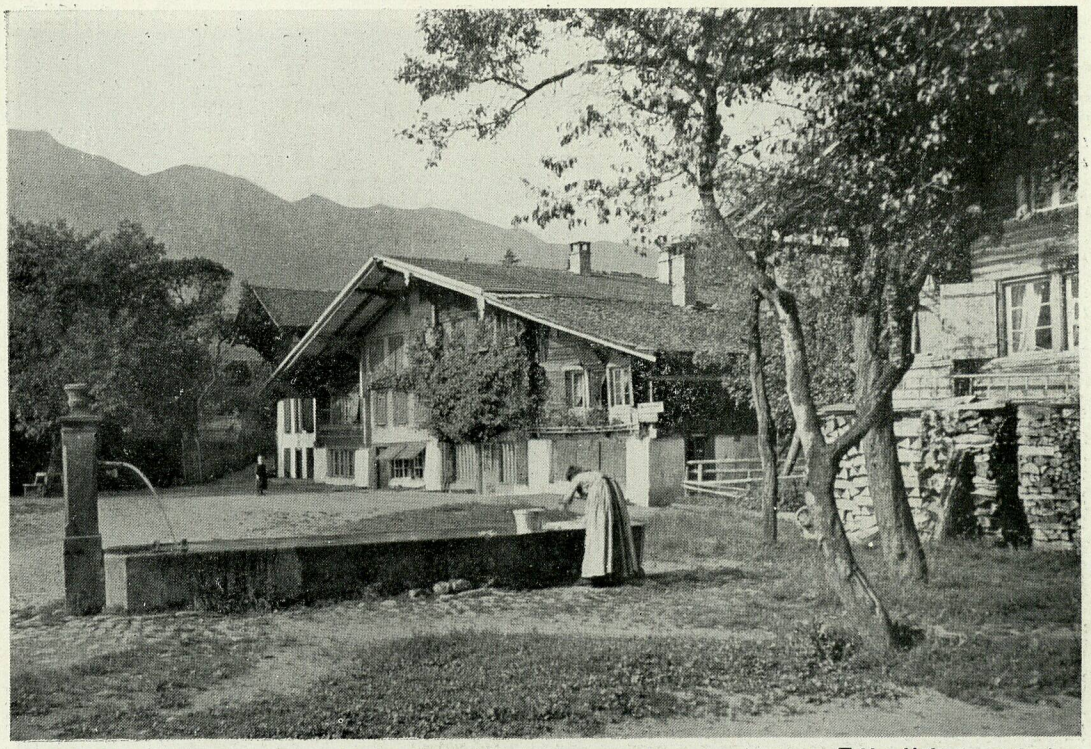
この『彌生祭り』の行事は、スウィスの山村情趣を最も濃厚に現はしてゐる。バウィール氏によると、この祭禮は殊に村の子供達にとつてこの上もない樂しいものとされてをり、どこの村でもできるだけ派手に、賑かに行はれる。そして戸毎に寄附金を出し、集つたお金は全部村の小學校の校長に、委托する習慣になつてゐる。

春ひらく　ルーエ・ワ・ルの潔白なる乙女のスイウスの花一輪。曾て乙女の若き日の憧憬は何なりしか。今たつた一年の移りたつ女乙のスイウスは何に憧憬を求めるか？

このお金で、クリームや、お菓子や、砂糖漬や、その他子供達の好きな種々の品物が買ひ集められる。いよいよその日が來ると、村の學校で成績のよい學童たちが選ばれ、かれ等は街道に出て大きな牛の頸鈴を鳴らし、または鞭を振り廻しながら、次のやうな唄や歌つて練り歩く――

彌生のはじめ
卯月のはじめ
厩の扉を開け
牛どもを放しやれ！
雪は消えゆく
草は芽を出しよつた。

村中を練り歩く途中で、子供達は、かれ等の唄や音樂に聞き惚れて寄

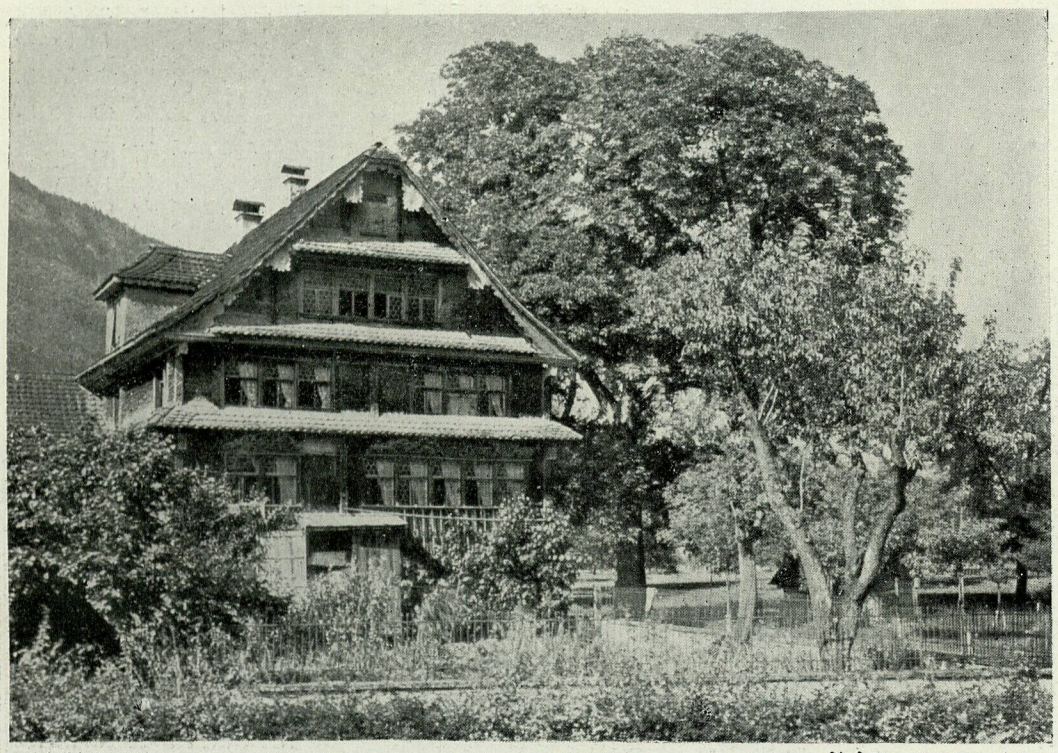


ベルニーズ高地の村景 靜寂そのものを言葉ふいとあとりたつびが葉言ふいとのものを寂靜。朝の村の地高ズーニルベる

つたあ陽太に殘り消くなり共同水道に何ゃら物洗ふ婦人も畫ゐうさ入け濱にちう。春い山きだまい姿ま村の村にでまきしま靜け靜よ。

山の遞送馬車 上つたが陽の貧を道山の崖斷つ立切てし御を車馬をの立頭四も今を道山てつ許り瓢け道小の遞送馬車のスプルア・スィウスるを車馬

眼の前に展けた村落は未だ明けきれないいらいなに遠つ立聳とりすつうに。山がゃく咲てあでうらの深山の花に等れかの樂を眼せましるを日も近い!



ジイテッコのスィウス 圖は中央スィウスにおける典型的の住宅である。すくすくと伸びた樹々は夏の日除けであり秋もあでやかな色彩に染まり美しい。うらあでるなと飾装きなよこは葉たいづ色ばれな。だ所なうされなにき好が日のそ日のそがれわれわるぎ過れさま惱に苦代近にりまあ

枯草を運ぶ 山間の秋の早い。野も山も一面に黄に紅に彩られたなかを枯草を牛に積かせた打ういういてせか曳るせた打ういういてせか曳牛を草枯をかなたれちど彩に紅に黄に面一も山も野。い早は秋の間山

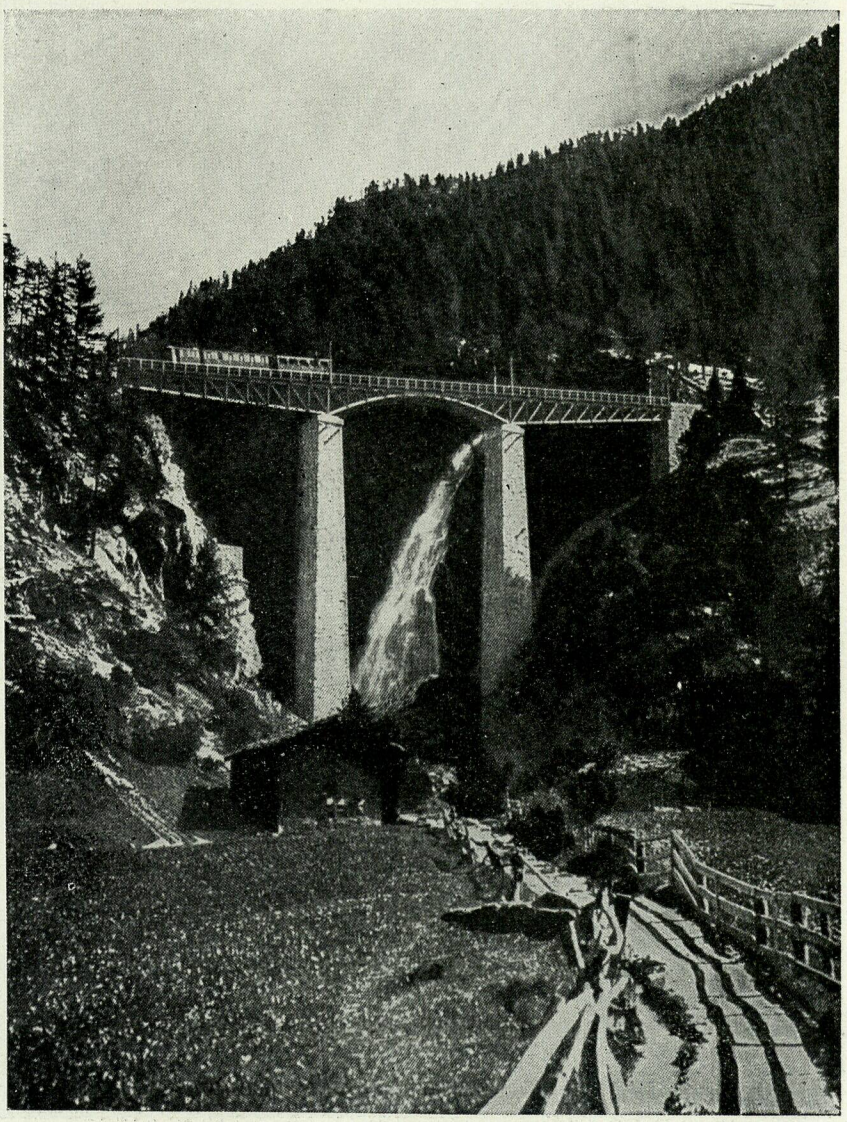
あばおのンイデガンエ下るるてれさ殺忙にりたつましをれそりたし干を草はちた女にめたの羊や牛るあてつ飼んきくたに意用の雪る積が雪にプルアてがゃんさ。

進を申し出る人々から、栗の實やその外いろんな美味いものを貰ひ集める。そして次の日曜日の來るのを待つて、この澤山な贈り物を、立派に飾り立てた屋臺の上にならべ、村ぢうの子供、——赤ん坊まで——が招かれて集る。そして夜食後には達者で長生きするやうに、また來年の彌生祭りの來るまでに、早く可愛い赤ちやんが生れるやうにと、樂しいダンスを初める。

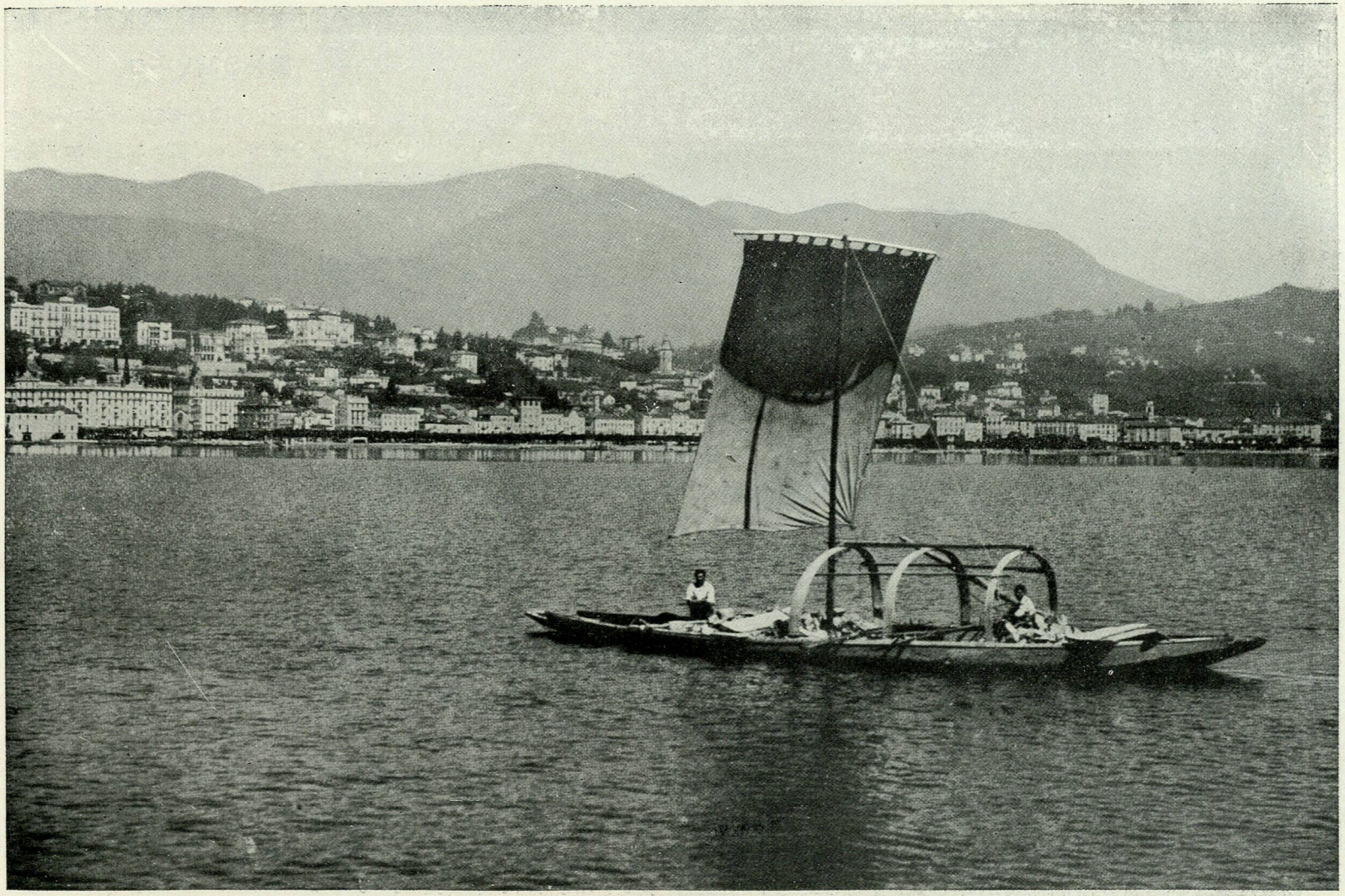
氷河を溯る羊の群

春早い頃、アルプスの峠路を越える旅行者は、時に氷河の裾や萬年雪に埋められた谷の小徑で、長さ數十間に亙つて、數百頭の羊の大群に往く手を阻まれることは珍らしくない。そして二人か三人の牧羊者が——ときには夫婦連れや子供も混つて——一匹の驢馬にテントや食糧を積んで、別に二三匹の犬が群を外れようとする羊を逐ひ廻しながら、氷河の岸邊を逐ひ登つて行く情景に接するであらう。かれ等は氷河の岸邊の雪が解け、若草の新芽が萠えでる山路を逐うて、羊とともに放浪の旅を續けるのである。

牛や山羊は、大概村の上のアルプで半歳を暮らす。この牛どもは、多くゼンネルと呼ばれる村の壯者か、ゼンネリンで通つてゐる小娘によつて飼はれる。このアルプの百姓達の若い青年や娘達が、綠の牧草に腰をおろし、氷雪の冠をいただく四圍の山々を背景に、自ら口ずさむヨーデル（牧歌）の反響に聞き惚れる光景は、ロマンティックな山村生活の一畫面である。しかし、このゼンネルやゼンネリンの生業は、見たほど呑氣なものでも樂しいものでも決してない。かれ等は毎朝太陽が出るより早く眼を醒まし、何よりも先づ家畜どもを、圍ひから連れ出さねばならぬ。そして朝と夕に、毎日二回づつ牛乳を搾り、それを村や街に運ぶ外



山の一軒家　鷹ろ飛び囀る。牧場に咲亂れる花。家畜の逃げないやうに道を阻んだ垣根さへ效果を添へて世の樂しさは露ほども知らぬ山の中の一軒家。こゝヒンデンレン橋の下ゴ下ルナーグラッツバーンの一村落である。



リュガノを滑る　油のやうに穏やかな水を滑る幸福さをしみじみと味ふ船頭たち。遥に見える山は薄雪りかつすうもは解け崩てたえて新芽の草のえ映に緑ゝこ。るるて特い白面の有恰女船の陽と顔をかづわにかどの心は人船てえもは炎陽もに上の苦ろぼお春。うらあでるめしは思を宮寵のらがな世のこ然宛は物建の聖白ぶ並てし落を影に畔湖。いまれらへ響かしに夢はまさく行てを孕んをと風とそよでなるを。

に、チーズを作ることも重要な日課であり、しかも極めて骨の折れる稼業である。スウィスで、一番高い位置を占める牧場は、ツェルマットの上にあるリッフェル・アルプだといはれる。そこでは二、四〇〇メートル以上の所で草を食んでゐる家畜が見受けられる。そして牧牛の群は夏場を過すために、しばしば氷河を越して上の牧場に出かけねばならぬ。

百姓達の素朴で質素な山村生活について、アーノルド・ラン氏はその著「青年の山々」中に、ローン谿谷の支流ティナルの谷について次のやうに述べてゐる。

「かれ等――百姓達――の生活は、快樂といふものから極めて緣遠く、しかも精根を盡して土のために働く若者たちは、時にダンスをすることもあるが、ひと度結婚するともう踊りはお終ひである。そしてかれ等は一生懸命に働く。初夏が訪れると、しばしば群をなしてジーレの葡萄園に働きに出かける。かれ等の多くは富裕であるに拘らず、決して汽車に乘つて旅することをしない。そして僅の金（汽車賃）を出すことを惜んで、ジーレからシーヨンまでもてくてく歩く。そしてから等は決して金錢に富んでゐないが、所有物において豐富である。そして働き貯めた金はその場で牝牛や土地と代へてしまふ。またから等は決して食物のために金を支拂ふやうなことはない。何故なら、パンは自分達が燒いたもの――それは大概の場合古くて堅い――を食べる。そしてしばしば三十年も四十年も貯藏したチーズを好んで口にする。かれ等の間では一八八五年製のチーズ（それはチーズの當り年といはれる）を珍重がり、酸っぱくて舌を刺すやうなのに特殊の嗜好と風味を貴ぶ。かれ等は肉を食ふにも、三月か四月も經つて、乾物のやうになつてからでなければ口にしない。また決して砂糖を使ふことはない。

ローン河の水源

スウィス風景の眞價は、その大半を背景となつてゐるアルプスの雪嶺氷

フルカル峠から見たアロザ　アロザは海拔一八五〇メートル、ルツェルンから二三キロ。ここのどほとんどアロザにふいと町があるあの避暑地として有名な名所に國各洲歐から昔でしたあるこの町を圍んで林の松老たしと蒼欝に當相がムーリトナサにゝこれまで盛に避暑地としてゐる。

岳に負つてゐる。そして壯麗なアルプス景觀は、またその山肌から懸垂する驚異的な氷河の存在によつて特徴づけられてゐる。

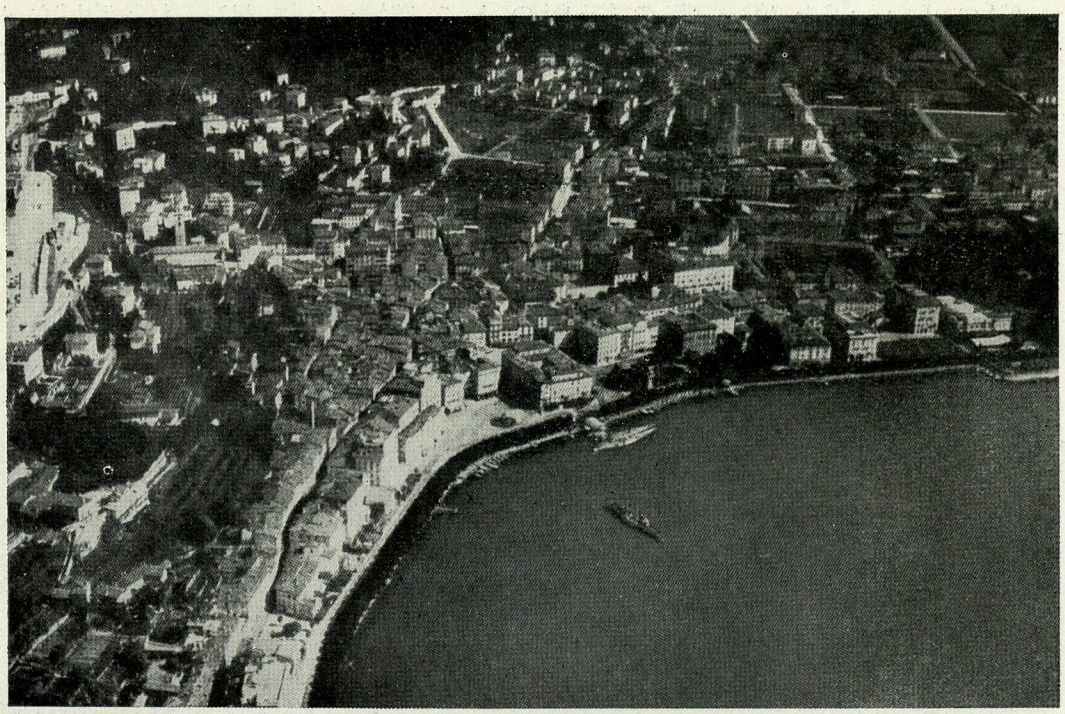
元來、アルプスの氷河は、規模の壯大な點ではカナダ、アラスカなどのものに較ぶべくもないが、急峻な山頂から一氣に綠野や森林を貫き、村落や耕地の中まで突進してゐる壯觀は蓋しその比を見ないといはれる。しかもアルプスの氷河は、頭尾もあらはに全身を剝きだしてゐることが、摸型的典型的として、專門家の研究に貴重なそして特殊な資料を與へてゐる。

氷雲の頂から、海豚躍る地中海まで――ローンの流れを逆にさかのぼると、その究極はアルプスの一氷河ローン・グレッチャーに達する。ローン氷河は、數あるスウィスの氷河觀光地の中でも典型的であると同時に、交通の便に惠まれてゐるので知られて

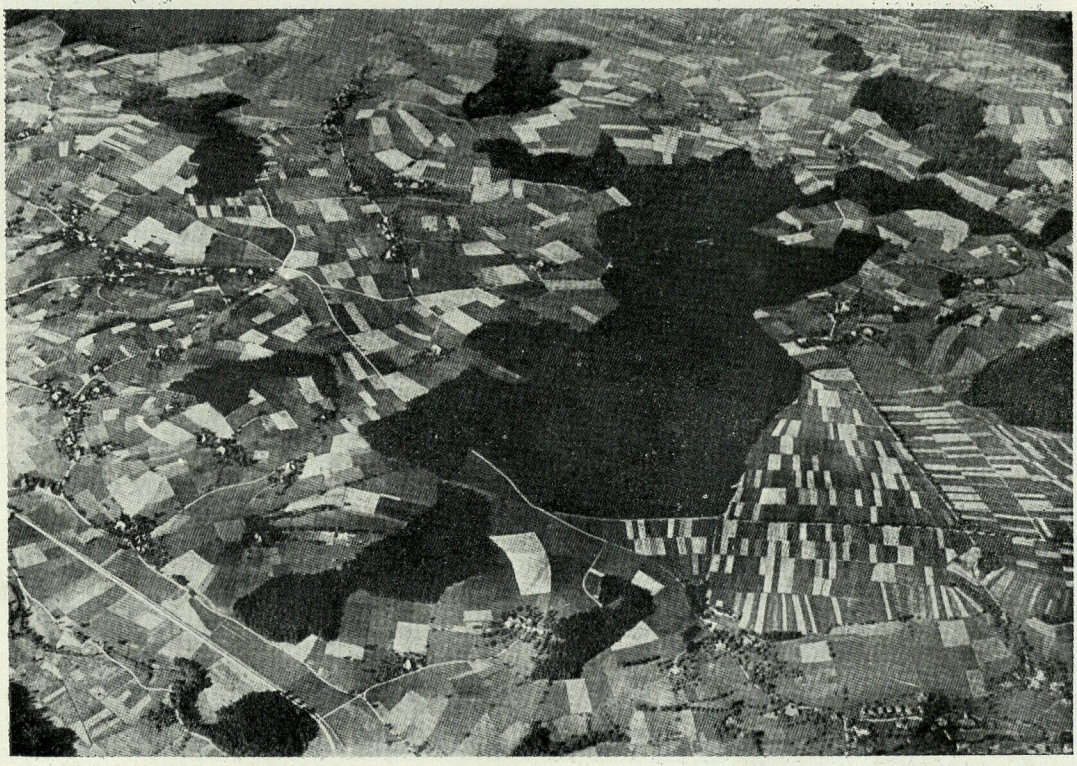
日向に頭を揃へて 風は死んだやうに靜かである。小波一つたゝない川にうらうらと照る日を浴びて暖い冬の日の衣垢を落すおかみさん達。水に入れた手を動かす毎に小さい波紋ができてだるい迄に快よい陽はそれをきらきらと照らしては消えてゆく。春の一スナップ。

ゐる。氷河が穿つた谷の入口にグレッシュと呼ぶ村があり、氷河見物や避暑客の便に供するためにザイラー經營の高宏なホテルもある。こゝはフルカ峠の關門であり、スウィス・ラインランドやゴットハルトに通ずる要衝になり、またグリムゼルを越えてマイリンゲンに達する路の分岐點でもある。村からローンの溪流を遡ると、直ぐ氷河の末端に取付く、永遠の氷の底を潛つて來た奔流が、蒼氷の洞門の中からほとばしつてゐる。これがヨーロッパの大河ローンの水源である。

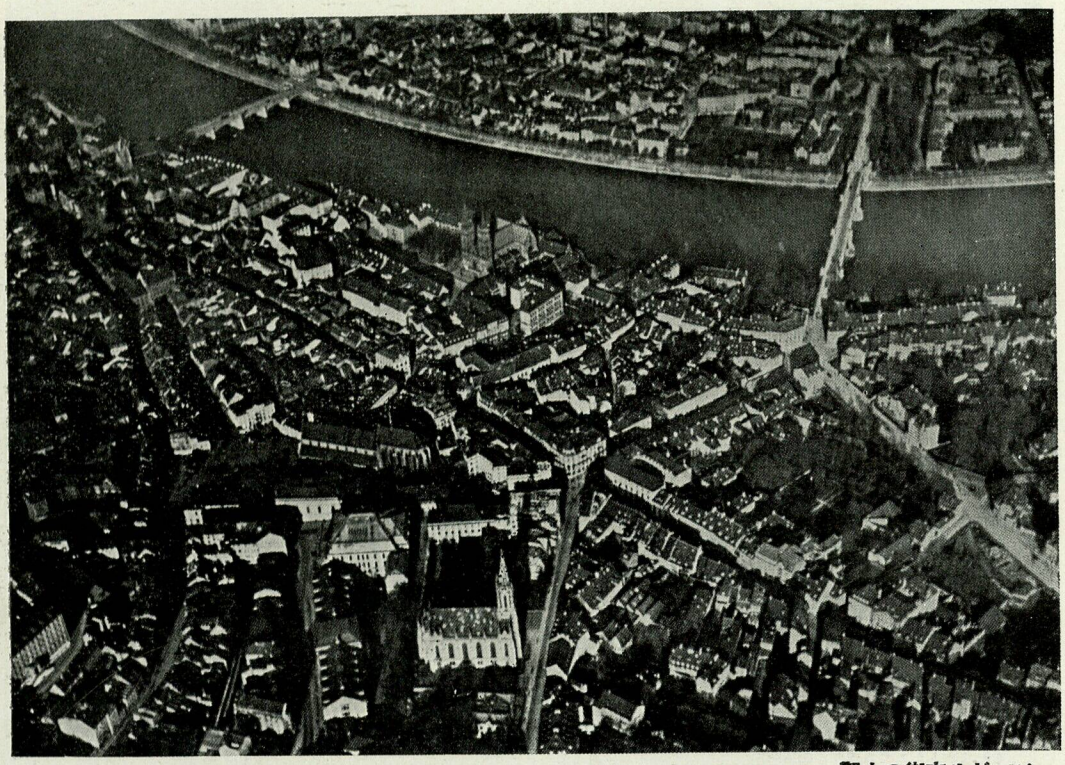
氷河の一方には、觀光客に見せるための人工的な氷のトンネルが鑿つてある。この氷のアーチに踏み入ると、頭上を掩うた淡青色の窿穹はカプリの洞窟にも比すべく神祕と莊嚴の極致を現はす。更に氷河の岸を遡ると、見渡すかぎり氷と雪の極地的景觀が展開する。そして曠漠たる雪原を貫いて、ゲルステン・ヘルナー、ゴルメル・ヘルナー等の連嶺が亂杭齒のやうな岩峰を押し列べ、右手の奧にはガレンシュトック（三・五九七メートル）ダンマシュトック（三・六三三メートル）およびローンシュトック、（三・六〇三メートル）などの峻峰が、碧落を劈いて聳えてゐる。



リュガノの風景　狹く長く突き出てゐるアルプスの山麓が身を横たへてゐる。波止場は非常に調和の取れた立派な小大の種々の建物が帶狀に並んでゐる。海岸に沿うて一連の綠の樹木が並木をなしてゐる。夏の夕暮は殊に美しく、靜かな波の上に明るい月光が輝いてゐる。

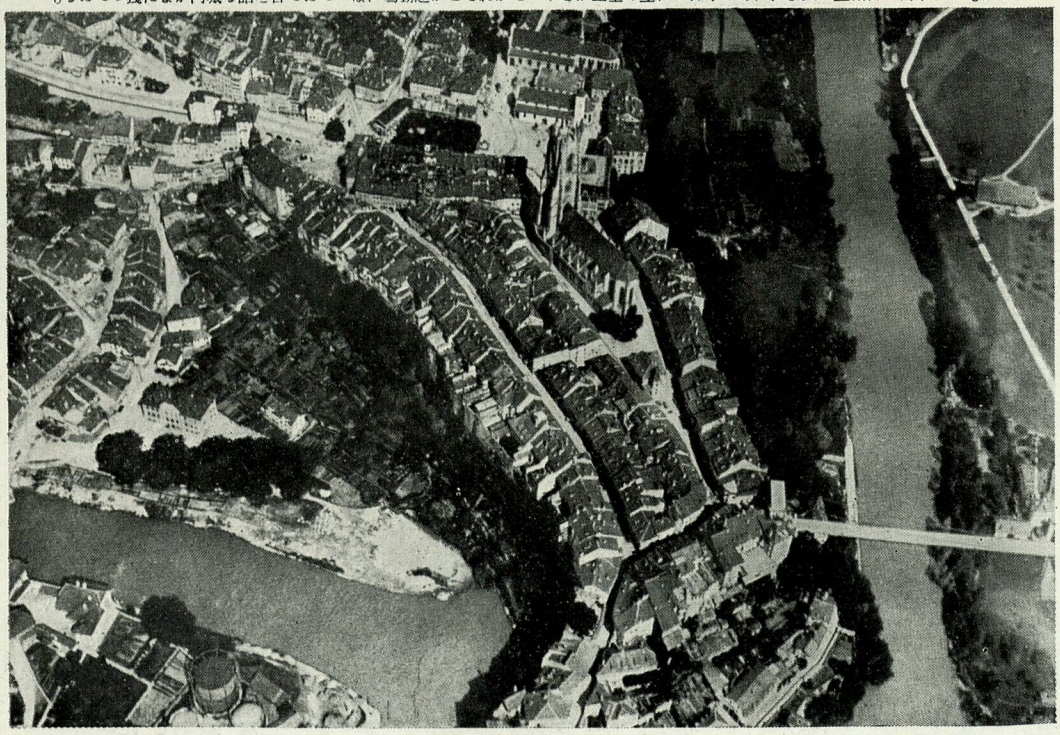


ルイウトツフの展望　ベルンの東北約四〇キロのところにあるルイウトツフの町から南方の傾斜地アラータンメエの方を眺めたところ。寫眞は主として麥畑の收穫が多い。この邊は長方形の畝田の形をなしてゐる。麥畑のクイザモでゐるまに麗しい綠の一面の耕作地が望まれる。



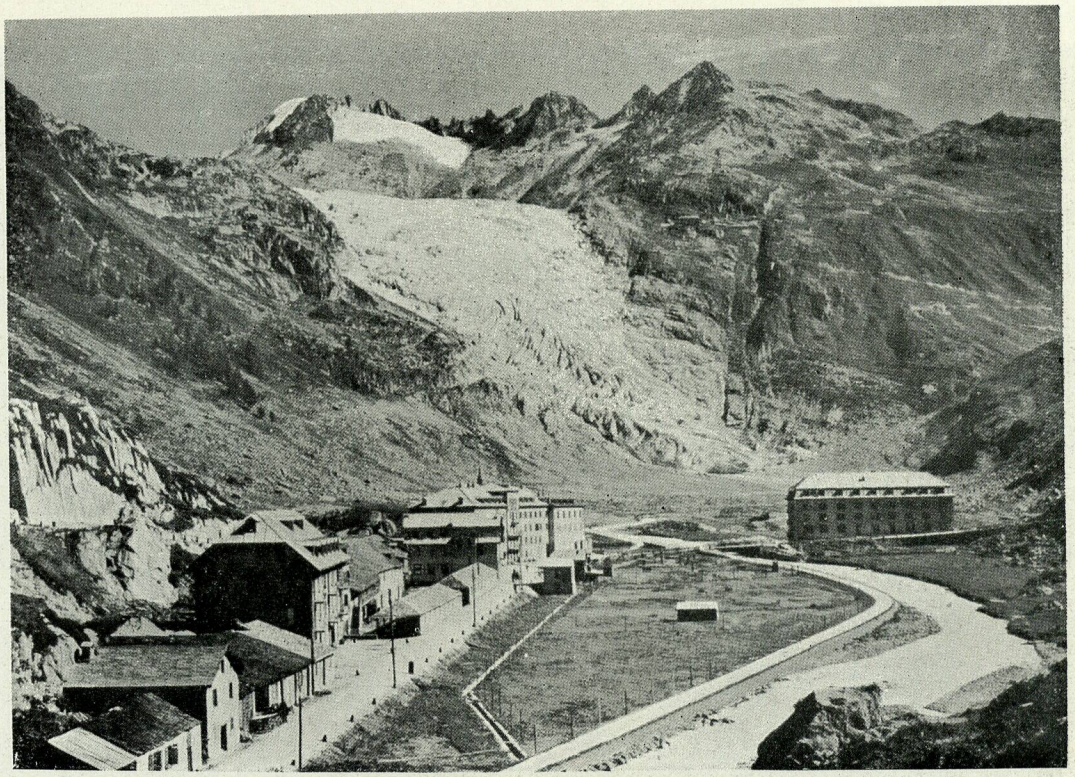
ルゼーバの大觀　市街は イラ ン川を隔てて二部に分れ左側の川はルゼーバ・スツログと呼び右側をルゼーバ・ンイラクと稱し

る。ある古城壁で囲まれた町で今日は城壁や塁壁がこれかぞのりとが塞塁の場動運がこれそれに昔を語る門城だけが殘つてゐる。この市街は昔ある



グルブイラフ市街　こゝはクラフ・オフレスト の美しい景色に取まれた海拔二八〇メートルの高地にある。市街は旅行者を

惹きつけるに足る立派な建物が緑の樹林の蔭に整然と並立んで都麗な街を成してゐる。なかでも市の寺院は上品な建築の式クッシゴな大壯でものもある。



ローン氷河と フルカル街道　ローン氷河は歐あるスウィス・アルプス中の隨一のものかつては谿谷の半ばを埋めたるたるはれる。こゝから滴る水は集まつてローンの河になるる。こゝは有名であるためにこの四時客が絶えない。前方フルカル街道に沿ふ氷河ホテルである。

氷河に纏はるロマンス

ローン氷河は、第十九世紀の中頃にあつては谿谷の過半を埋めてゐたといはれ、それがアルプス氷河の一般的な衰退とともに谷の奥地に退却したが、一九一六年には再び谷の下流に進出し初めた。その原因について氷河學者の説によると、河川に洪水があるやうに氷河の洪水現象だといつてゐる。即ち上流の山地に大雪が降れば、それが氷の洪水となつて下流の谷や平地に氾濫するのである。もちろん大雪が降つた年と、下方で洪水ならぬ洪氷現象を齎らすのは、恐らく數十年の間隔が存する。

氷河の運行はすこぶる遲々たるものであり、その速度は地盤や斜度により遲速はあるが、モン・ブランのメー・ド・グラスで、チンダル博士が試驗したときは一日に六メートルから九メートルを測定してをり、大體一年を通じて一三〇メートル乃至一八〇メートルであるといはれる。曾て一八二〇年に三人のガイドがメー・ド・グラスのずつと上方のコル・デュ・ジンの附近で、氷河の裂目に墜落して行方不明になつた椿事があつた。當時英國の有名な氷河學者フォルブス氏は、氷河の運行の速度と墜落した地點から算定して、行方不明になつたガイドの死體は四十年後にメー・ド・グラスの谷の末端に現はれると豫言した。果せるかな四十一年を經た一八六一年に三人の死體がシャモニーの谷の上で發見されたといふ。

また、新婚旅行を兼ねたアメリカの觀光客が夫婦で氷河見物に出かけ、夫がクレヴァス（氷の裂目）に墜ちた。これを傍に見てゐた花嫁は狂氣のやうになつて救助を叫んだ。ガイドや村人が驅け付けたが、裂目が深くて狹いために施す術がなかつた。その後來る年も、來る年も、氷河が解ける夏になると、當時の花嫁はこの村に現はれ、毎日のやうに氷河の末端附近をさまよつて亡き夫の遺品の一つでも現はれはしないかと探し廻つてゐた。そして遂にその時が來た。現はれた夫の死體には、結婚當時のエンゲージ・リングが指に嵌められた儘であつた。しかし遺骸に

取り絶つた當時の花嫁は、既に白髪を戴いてゐたといふことである。

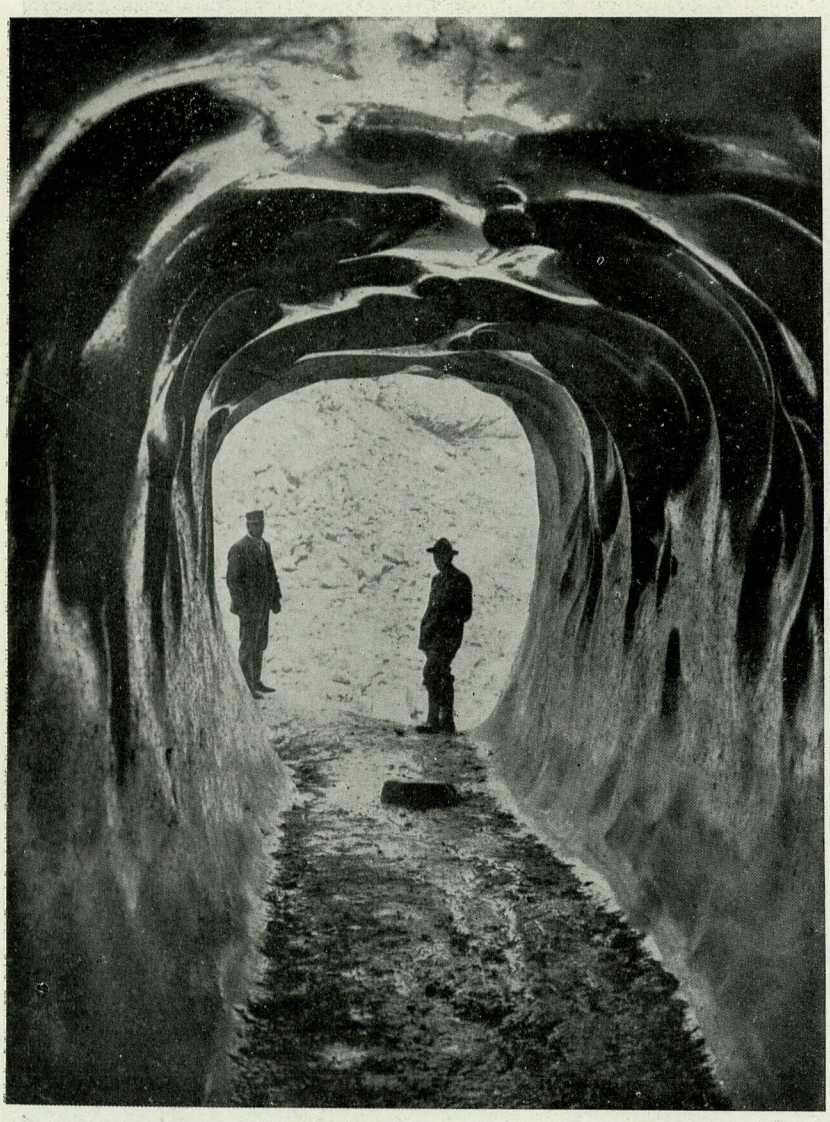
山から湖へ！

アルプスの氷河見物を終へ、一氣にローンの谷を走る汽車を利用してジュネーヴ湖畔へと下る。

ジュネーヴの湖岸に出る手前に、マルチニーと呼ぶローマ時代からの古驛がある。スウィスからシャモニー・モンブランに通ずる關門であり、またアルプス最古の峠として歴史的にも有名なサン・ベルナール越えの入口でもある。岩と氷の嚴しい連嶺ばかり仰いでゐた眼には、ジュネーヴ湖の波一つ立たない碧水を望んだ時には、大洋の岸邊にでも佇んだ氣がする。旅行者がしばしば「スウィスの艦隊」と洒落れて呼ぶ汽船に乘つて——琵琶湖上の遊覽船のやうな——湖岸を一周するのは、スウィス旅行を打切る最後のプランに適はしい。シヨンの古城に窟牢を訪ねてバイロンの情熱を偲び、そこの石柱の一つに遺された署名の跡を尋ねるのもなつかしい。モントリュー、ヴェヴェーを過ぎると、やがてローザンヌの岸に着く。綠の丘陵の上に聳えた寺院の尖塔や赤屋根のホテル、湖岸の水色バルコンが一幅の繪のやうに浮ぶ。

汽船は最後の汽笛を鳴らして、夕暮近くジュネーヴの棧橋に着く。この國際都市——それは國際聯盟本部の所在地として、世界の平和を高唱し象徴する都市ジュネーヴ——名所や舊蹟の訪問もさる事ながら、何よりも先づキイ・デュ・モンブランの樹蔭に腰をおろして、夕靄煙る湖の奥に映えるアルプス第一峰、モンブランの靈峰を仰いで、スウィス旅行の名殘りとしよう。

（藤木九三）



奇觀一氷のアーチ

グレッシュの村近く、ローンの河の水源の氷河に世界各國から集まる觀光客のためにめたアーチがでてきてゐる。そしてこれの洞窟のやうな神秘さと壯嚴さとは見る人々の目を見張らせてゐる。

牧草刈り　リヒテンシュタイン公國はスウィスの一部分のやうに思はれてゐるが事實は小さい乍ら立派な獨立國である。しかしイラもかしの流域に夢の如く擁がゐる伽藍のやうな國である。寫眞は手和な一家族が和やかな陽を滿身に浴びて牧草刈を楽しみながら集きかをめてゐる。

八、リヒテンシュタイン公國

世界最小國の一

ライン河の上流、アルプス山地を出てボーデン湖に注ぐ間に、二等邊三角形の一大平野がある。その東方はオーストリヤ、西方はスウィスで、兩者とも今では共和國である。そのオーストリヤ側の一部にリヒテンシュタインといふ、面積一五九方キロの小さな國があつて、こゝに人口約一萬の國民が、僅に君主國の面影を殘してゐる。

この國は南北に長く、ライン河に沿うてをり、川邊に僅な沖積平野を見る。これに沿うて一條の山地がありその連嶺の後方に深い谷をもつ。卽ちその平野と、谷と、山地がこの國の全領土である。嘗て地理學者エリセ・ルクリュが、ライン河が一朝氾濫せば、この國の大半は浸水するといつたことがあるほど小さいのである。もとローマ帝國の直轄の采邑であり、シェーレンベルグとヴァズーツの二國の合併から成り立つたもので、前者は一六九九年より、後者は一七一二年より、今のリヒテンシュタイン家の領土となつたのである。

「汝は小に過ぐ」

リヒテンシュタイン家といふのは、オーストリヤで有力な公族で、一七一九年來ドイツ帝國の公族となり、專らライン聯邦、幷びにゲルマン聯邦（一八一五——一八六六）の一會員であつた。が、オーストリヤがドイツと分離してからは、全くオーストリヤに聯合してゐたのである。最近の世界大戰中には中立を守り、一八〇〇年來の國歌『ドイツ、ラインの源に』を謳歌してゐたが、ハプスブルグ帝室の滅亡に伴ふオーストリヤの政變に逢ひ、俄かに孤立の狀態となつた。それでその隣邦オーストリヤのヴォラルベルグ州と合併し、共にスウィス聯邦に加盟せんとし

伽の國の子供達　義務は納税すらなく平和な國を訪れたものは誰でも行つて村へ行つて町へ行くのである日のそらの村や町のそこに住み人達の上の丘の央中で町のスーザルバはこゝ。いゝ程に親しみ易く朴素でしとりびんのは達人の國のこれを一語に思ふ相違ない。それこそ中世紀の風俗人を喜ばせる。夢の國に遊ぶ子供等の幸福さ。

城グルベンテーグは今でもホテルにつながれてゐる昔を偲ぶ人の建物や飾の装度の

たが遂に叶はず、また國際聯盟に加入せんと、ジュネーヴの事務局に申込んだが、「汝は小に過ぐ」と、これまた體よく斷られたといふ珍談を殘してゐる。今では、現狀維持でスウィスと稅關同盟をなし、郵便、電信の事務をスウィスに委ね、またスウィスの貨幣を使用することになつてゐる。

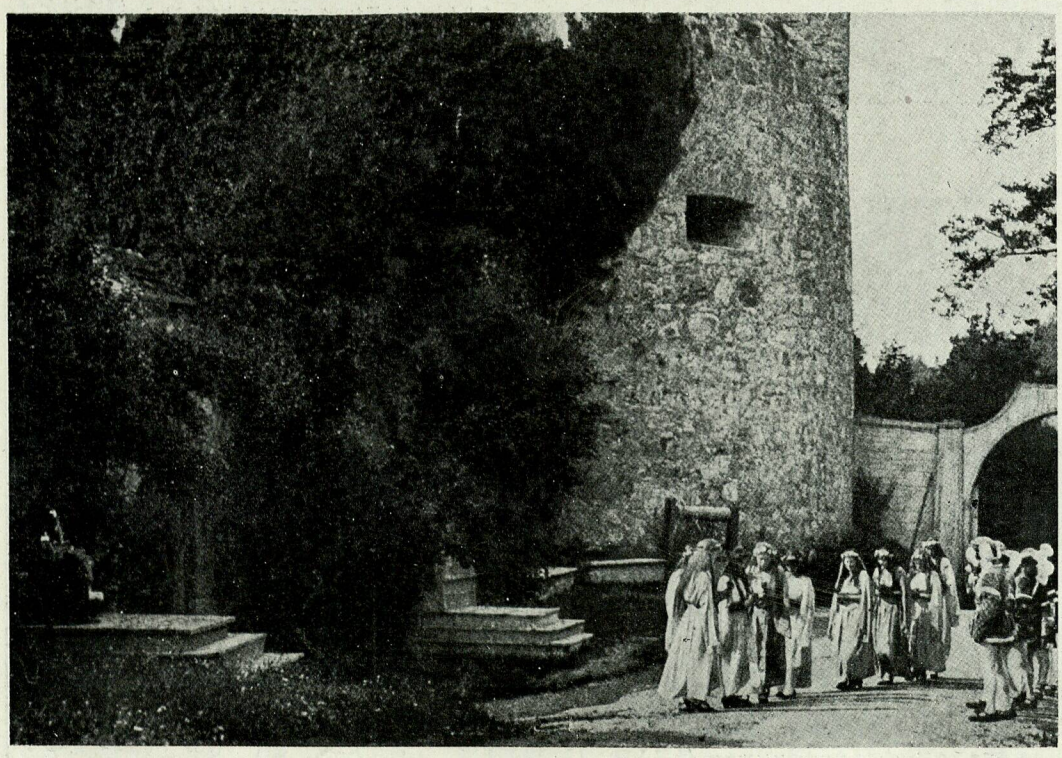
また內政では一八六二年の憲法を廢棄して、一九二一年新憲法を公布した。そしてそれには、この國は立憲君主國で國公の位はリヒテンシュタイン家の男系に繼承することになつてをり、國公不在の場合は、同公家の男子が代つて政治をなすことになつてゐる。議會は一五人の代議士があつて、四年を任期とし、二十一歳以上の國民より普選により選ばれるのである。そして議會解散の場合は、國務委員會なるものが一時設けられ、これには前議會の議長と四人の委員が選ばれる。また國務長官は議會の協賛を經て、國公が任命し、任期を六年とする。閣員二名、任期は四年で何れも選擧による。

平和なる母と子　道端や野原の上十字架のキリスト像の守るこの平和な山間の一小國は全歐を震駭させた世界大戰の時平和を纒つて落ちのびて來る人達の隱家だつた。雲の向ふの山と谷との間にライン河が流れてゐる。

納稅の義務なき國

何れの國でも議會の主なる議事は豫算の編成であるが、この國では國公が內帑金を國費として支出するので、議會の開會は必要がない。たゞ僅に新憲法發布前に、一度議員を召集したことがあるといふに過ぎない。それ故國民は納稅の義務がなくまた國債もない。更にこの國民には兵役の義務がない。それは一小國で、國防の要がないからである。しかし嘗ては一度サドワの戰に、八四人の兵士がインスブルックまで進軍したが、戰功は樹てなかつたといふことがある。

古風なペイジェント(一)　リヒテンシタイン公爵の首都(はちょつと大袈裟だが)ヴァーズツの丘にあるこのお城で中世紀の劇外野的な情詩的生活を現出し、夏の村の若者や娘達によつて盛んに行はれる。これは古來有名なものであつて、多くの外國人が訪れ、見物客のためにわざわざ見せられる。これもまた劇外野の一つである。



古風なペイジェント(二)　夏の村の若者や娘達によつて盛んに行はれる。これは中世紀の劇外野的な情詩的生活を現出し、ヨハネ二世王國の上の丘にあるこのお城で、ツーズッヴは(がだ)大袈裟とつよちは)都首のンイタリヒテンシ

古風なペイジェント(一)　リヒテンシタイン公爵の首都(はちょつと大袈裟だが)ヴァーズツの丘にあるこのお城で、ヨハネ二世王國の上の居城が博物館を兼ねて在る殿下は大抵ウィーンに夏になると若者や娘達が盛んに行はれる。これは中世紀的な劇外野的な情詩的生活を現出し、

女料理番　これはたまたまホテルのクツコのおばさんの婆さんでもあるこの人はいつもにこにこして働くのが樂しさうな老人である。

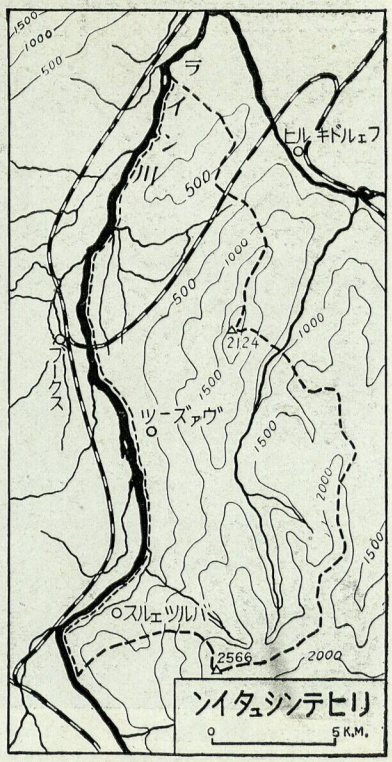
次にこの國の領主リヒテンシュタイン公は、もともとラヴィヤに國を建てたが、種々の歴史關係を經てヴラルベルグの西邊に同名の國家を有するに至つた。その後オーストリヤ分裂に際し、國公も常住地であつたウィーンを去り、リヒテンシュタインに移り住み、またチェコ・スロヴァキヤにある御料地の事務局もその首府ヴァズーツに移したのである。

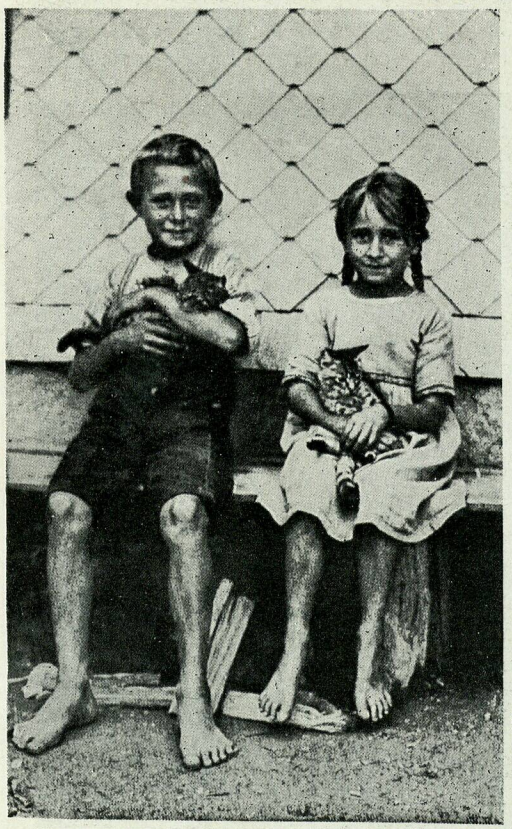
ヴァズーツは山地の西斜面、小高いところにあつて古城を存し、住民の家はその北側に連つてをり、人口一萬五百、一小農村に過ぎない。國民はドイツ系で天主教を奉じ、地は葡萄酒、果實、木材を產し、山の草地には牧畜が行はれてゐる。

一目に見える全國土

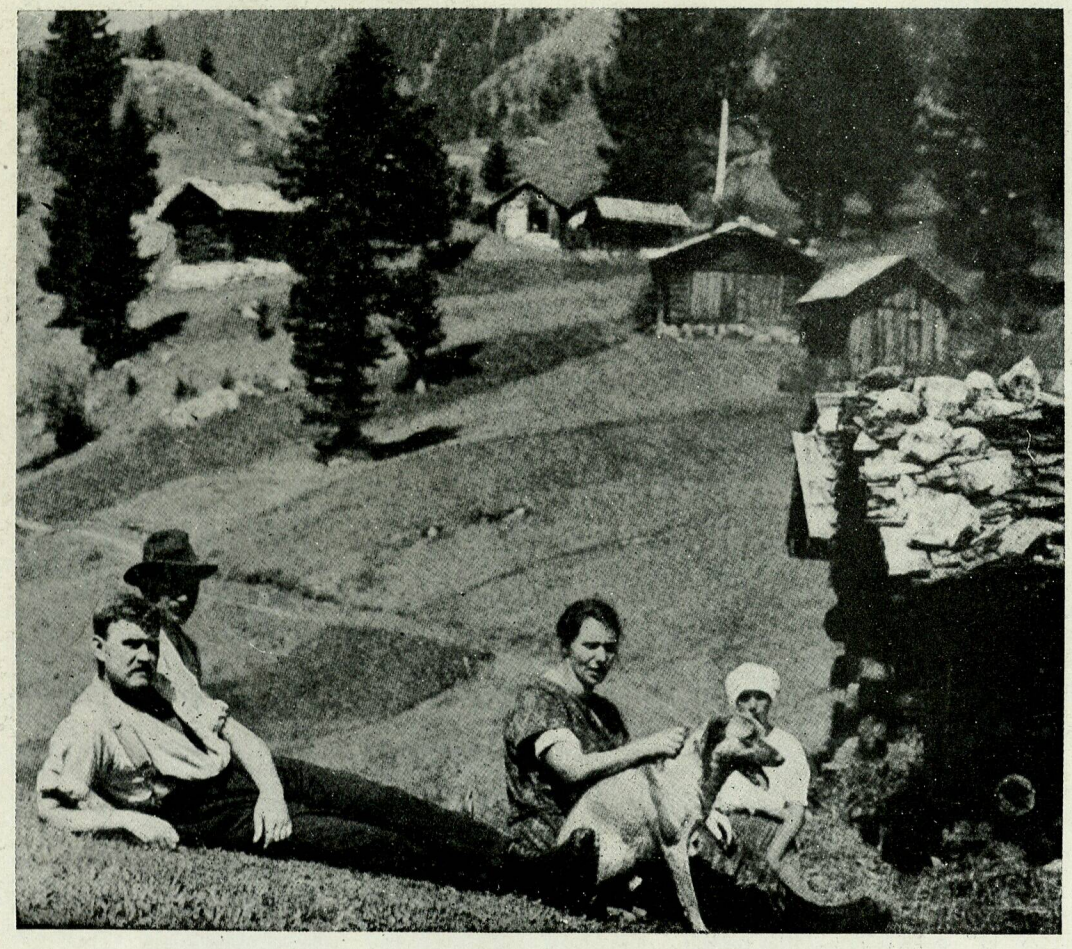
この國の北部をかすめて、パリ、ウィーン間の國際鐵道が通過してゐる。それでこの國を通過する旅客は尠なくはないが、國內に國際列車の停車場が全くないので、多くの旅客は知らぬ間にこの國を過ぎてしまふのである。

大正十一年の秋、私はスウィスのチューリッヒに滯在中、この國の見學を思立ち、スウィスのゼベラン驛に下車した。ライン河の堤防を溯り、橋を渡ればリヒテンシュタインである。途中稅關吏に呼





猫と供子　猫は膝の上に供子を抱いてゐる。供子は可愛いこつぼ向日葵の花の中にいる。供子はなにもいらないのだが、猫は嬉しがつてゐる。



草原の憩ひ　この國では地平は殆ど農作に適し丘陵は家畜を飼養し牧草を乾草に用ひられる。そしてこれは殆ど全部住民の所有である。農夫の系統はイタリヤ系で、何物にも汚されたる事なき清純な聖神の特色である。かいにくこの國は小幸福な國である。

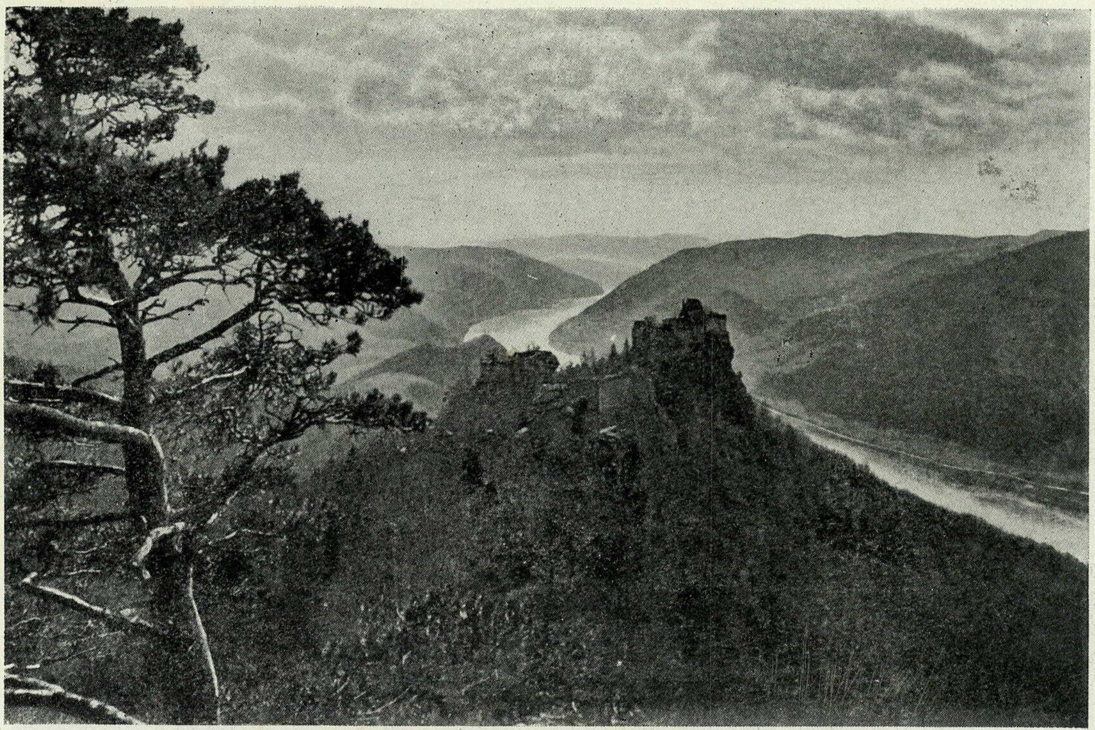
び止められたので、リヒテンシュタインに行くと答へたところ、旅券はとのことに、オーストリヤ入國の手續があると述べたが、それでは入國できず、この國の公使の査證が入用であるといふのである。如何にすべきかと迷ひ問ひ返したところ、その吏員は、國が小さいから堤防上から全國土が窺はれる、橋は中央までスウィスの領土になつてゐるから、そこで望見すべしと、笑ひながら去つてしまつた。實にその通りである。私は橋の中央に立つて眺めた。公城も人家も見え、その兩方の小高いところにできた大工場なども見られた。

空は藍青の秋の日に輝き、綠織なすリヒテンシュタインの野邊には、乾草を集むる牧人等の歌ふ聲が朗らかに平和な國を包んでゐる。遙の森、こなたの流れ、この小さな國を繞る山塊と分水嶺は地形地質と、人文地理等の研究にもまた面白いところであらう。

それでもマルブンの鑛泉療院と、小國には大き過ぎるほどの赤褐色に塗られた圓形劇場は、ウィンター・スポーツ・マンの樂しい集合所である。箱庭の國、しかし和氣靄々たる家庭の團欒と、平和な靜かな夢を包んで秋は暮れてゆく。

鋸齒の如きテリイ、シェヴェステルン山（二、一二四メートル）を背景にしたリヒテンシュタインの古城と、その前に開けた沃野、それらの景觀は中世を語る、平和そのものの趣に溢れてゐるのである。

（田中阿歌麿）



ドナウの流れ　歌に名高いドナウの流れはオーストリヤに入つてから山の間を流れる。オーストリヤの中の沃野はすべてこの川に育ぐまれてゐる。これはウイーンに近いワツハウにあるアガスタインの古城である。かつては山賊の住家とさへなつたものだといはれてゐる。

九、オーストリヤ

東方の帝國

歐洲の中心も今は昔

「道はすべて都會に向ふ」執着を知らぬ遍歴の旅行者として、吾々が西ヨーロッパの一角に足をふみ入れるとき、吾々は幾百マイルの道が自ら皆近代文化の首都パリへ、あの金色の夕陽流れるセーヌに跨る大都へと向ふのを見るであらう。丁度そのやうに東ヨーロッパにおいては、あらゆる道は「小さなパリ」ウィーンへと集中する。全ヨーロッパの中心に首座して、嘗ては東方の鎭めとして、輝かしい過去と傳統とを祕めたローマ帝國の承繼者であつたオーストリヤ、「東方の帝國」は、今や革命と敗戰の瘡痍を受けて國土は狹められ、その牧野であつた南スラヴ地方、その穀倉であつたハンガリヤ・鑛區と工場に充ちたボヘミヤ（チェコ・スロヴァキヤ）は各々自立し、ドイツ魂の傳統最も豐な南ティロルの山地の民まで今はムッソリニ治下のイタリヤ、ファシストの壓制下に泣いてゐる。

「オーストリヤ果して自活し得るや」面積僅に八萬平方キロ、人口僅に六百五十萬の弱小共和國となつたオーストリヤは、いま國を擧げてこの生死の難關に逢着してゐる。しかしそれにも拘らず、文化の都經濟の中心として、ウィーンはなほ東方の冠たる地位を失つてはゐない。最近には東歐及び中歐諸小國の間に、オーストリヤを中心とする經濟聯盟の交渉が傳へられてゐる。獨立自存に忙しかつた諸小邦も、今にして共存の必要と利とに目覺めて來たのであらう。同樣にまた新興ロシャの政治的壓迫を痛感する西歐の諸大邦も、昔ながらに東方の鎭めであるこの國を見棄てるわけには行かぬ。東方苦難の小國の將來に祝福あれ。しかし現